

有部論書におけるブツダについて

研究員 石田 一裕

「ブツダとは何か」ということは仏教学者のみならず、仏教徒にとっても重大な問題の一つである。この問いに答えるために、仏教学においては、中村元に代表される仏伝の批判的な研究や、荒巻典俊に代表される現存仏教テキストの最古層を決定する研究によって、歴史的なブツダの生涯や思想の再構成を目指してきた。

しかしながら、近年、このような研究に対する反省が生まれてきている。平岡聡は、従来の研究が明らかにしようとしたブツダを「歴史を作ったブツダ」と規定し、それに対して仏伝などが説くブツダを「歴史が作ったブツダ」と規定したうえで、後者を研究対象とした新たなブツダ研究の視座を打ち出した。筆者は、この平岡の提言を大変意義深いものと考え、「有部の歴史が作ったブツダ」を研究することで、この研究の意義を深めようと考えている者である。平岡は仏伝によって「歴史が作ったブツダ」を研究しており、筆者はこれを手本として、論書における研究を試みる。具体的には、有部論書の帰敬偈におけるブツダを考察し、そこに現れているブツダ像を明らかにすることが筆者の設定した課題である。

『俱舍論』帰敬偈には、自利利他円満したブツダが説かれ、テキストはこのようなブツダを「如理師 (yatharhasāstri)」

と表現する。この語によって表現されるブツダ像を、筆者は「説法者としてのブツダ」ととらえた。長行においては、ブツダの利他が正しい教えの説示によってなされたことが説かれており、有部がブツダの説法に注目していた点が伺われる。このような説法による利他は『心論経』にも確認でき、有部の歴史におけるブツダ像の一つであることが理解される。ブツダが「如理師」と述べられることは、やはり説法によるものであろうが、筆者はそれとともに論書を製作する人々にとっては、そのようなブツダを自分と重ね合わせた可能性を提示した。つまり、ブツダを「師 (Sāstri)」と捉えることは、「論の製作者 (Sāstrakāra)」である自己とブツダを関係づけることであるという解釈を筆者は提示した。この点については、今後の重要な研究課題である。

また經典の冒頭部の帰敬の文や、『中論』の帰敬偈についても、若干ではあるが、研究を進めた。經典の考察においては、個々の經典が様々な帰敬文を用いている一端を示した。また『中論』の帰敬偈には、縁起の説示者たるブツダが帰依の対象となっている点を指摘し、アピダルマとの関係が伺われる。今後は、論書におけるブツダ像をより明確にしていきたい。